

週刊ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成 17 年 9 月 12 日号

「日本の不平等 格差社会の幻想と未来」

大竹文雄(著)

日本経済新聞社 2005年5月23日刊

最新の人口動態統計によると、2005年上半期の日本の人口は、はじめて減少に転じたということである。少子高齢化社会が本格的にやってきたことを告げるニュースであった。

少子高齢化社会がもたらす様々な弊害や問題を指摘する声の中には、職業や所得、資産保有上の格差が拡大し、希望の持てない社会が訪れつつあるというものも含まれている。

本書は日本において不平等が拡大しているといわれるが、それは本当か、もし本当だとすれば、それはどのような要因によって説明できるのかを、自分で設計した調査も含めて、各種の統計データを丹念に比較検討し、先入観にとらわれず、説得的に分析したものである。

本書の主要な結論は(1)高齢化と単身世帯・二世帯が増加したことが不平等拡大の主因であり、勤労世帯間での所得格差が広範に見られる、いわゆる格差社会が訪れたとは言えないこと、(2)同一年齢内所得格差は高齢者ほど大きく、高齢者内での所得再分配政策を考える必要があること、(3)賃金格差はアメリカに見られるようには拡大していない、等である。

昨今、データの検討も不十分で統計的分析も欠陥だらけの拙速な実証研究が幅をきかせているが、著者の誠実な研究態度は、実証研究を行う全ての研究者の模範となるものである。

また、本書は他の研究者が用いてきた統計上の定義の誤解や解釈の違を指摘するなど、学界への貢献も大きい。著者が中心になって行っているユニークな調査も紹介されており、極めて面白い結果が出ている。

ただ、一部の研究者が指摘しているように、若者の中には定職に就けずに、フリーターになり、さらには家庭内に引きこもる者も少なくないことから、若年者内での不平等の増加が見られることも事実であろう。これらの現象が統計的に有意に観察されるまでにはまだ時間がかかるかもしれないが、彼らが高齢者になった時に見出されるであろう所得格差を考えたときには、現時点で何らかの若年者雇用支援政策を導入する必要があるように思われる。